第一章　歓呼の聲に送られて

終戦から五十年、半世紀をすぎた今、世代も代わり苛酷な戦争の時代も忘れ去られようとしている。『欲しがりません勝つまでは』を合言葉に過ごした少年の頃、すべては戦争に向かって一直線の時代であった。生活用品は配給制度となり、戦勝のニュースが流れる中、近所から伝わってくる召集令状の話に親達は困惑している様子であった。やがて、石上神社で出征兵士の部落壮行会となり、周西駅までのぼり旗を先頭に大勢の村人が続いた。歓呼の声に送られ、日の丸の小旗の中を離れて行く列車を見送った事、等々、昨日のでき事のようである。

大勢の村人に送られ、父も子も戦場に向かった

戦局はやがて激化の途をたどり、隣近所から多くの人々が召集され、国土防衛にあるいは遠く異国の戦場に向かって行った。銃後の守りは、女、子供、年寄りであり、増産増産のかけ声に、男手のない農作業は大変な重労働を強いられたのである。空襲のサイレンにも慣れ、敵機を見上げる生活の中にたびたび悲しい知らせが伝えられた。再びふる里の地を踏むこともなく、南溟(なんめい)の果に散華(さんげ)し帰らぬ人となったのである。

国の為に自ら志願し、身を挺して戦場に赴いた事実は、時代がどのように変わろうと、不滅の尊い記録として、後世に伝えることが我々の責務であろう。遠く祖国を離れ、銃弾と戦火の中をくぐり抜け、武運あって平和な日々を送られている方々には、従軍手記の一端を紹介し記録に留めたい。

第一節　外地出征従軍手記

齊藤　国三郎　陸軍飛行大佐　中富三一二番地　かじや
大正五年　志願　十八才　（新右衛門）
戦　歴
所沢飛行場　満州事変　チチハル　熊谷飛行場
太平洋戦争　南太平洋　シンガポール
米子飛行場長兼航空機乗員養成所長

大正五年、木更津中学校卒業、陸軍士官学校卒業後所沢飛行場に勤務、飛行機の操縦士となる。当時外国からの輸入機が多く、これをもとに新鋭機開発を進めているときであり、ドイツ、フランスから多くの技師が来日していた。試作機の段階では事故が多く、飛行機乗りは常に死と隣り合わせの時代であった。

昭和四年台湾飛行があり、所沢－太刀洗－屏東間往復（千二百粁）を加藤大尉と齊藤中尉で成功し、十五時間以上の滞空記録を作った。昭和六年、藤田大尉と齊藤大尉による陸軍最初の空中給油に成功した。（著書、日本飛行機百選より）

昭和九年、満州事変、チチハルに駐屯する。昭和十年、埼玉県の熊谷飛行場に勤務、操縦指導に当る。昭和十三年、米子市に飛行場が開設され、そこに逓信省航空機乗員養成所も併設され、軍籍を離れ、初代の場長、所長に就任した。

昭和十六年、突然召集令状が君津市中富の実家に届いた。『陸軍飛行少佐、齊藤国三郎、入隊せよ』。太平洋戦争突入であった。南太平洋に飛びシンガポールに駐屯する。

昭和十七年の秋、京都乗員養成所の飛行科長として赴任。昭和二〇年三月、再度米子飛行場長、兼乗員養成所長として赴任する。終戦となり八月二〇日退役。

昭和四〇年、米子市に於いて没す。　享年　六十六才

齊藤　聰　陸軍上等兵　中富二九三番地　六右衛門
昭和二十年二月十一日　召集　三十六才　祖父母　妻
戦　歴　子供五人
甲府四十九聯隊　博多　釜山　奉天　天津（無線教育）
秀麗作戦出撃　天津にて終戦

本土空襲が連日続くさ中、突然召集令状を受けた。時に三十六才、子供五人を残しての出征である。再びふる里の地をふむことができるのか。全員揃って船上から宮城遥拝し玄海灘を越えたときは、正に祖国決別の思いであった。釜山から貨物列車を乗り継ぎ天津において、無線を担当することがき

まり、連日きびしい教育を受けることになった。
戦闘といえば八路軍（共産軍）の襲撃を受けたことであろう。昼間歩哨に向かって、今夜攻撃する旨連絡があったという。やがて夜になるとチャルメラに似た笛の音を合図に、しかも立川班長を名ざしで降伏宣伝が始まるのである。すでに祖国日本は灰燼に帰し、君達の帰るところはない。厚く処遇するのですみやかに我々の仲間に入りなさい。やがて応じないとみるや、日本軍の陣地に向かって、銃火器、手榴弾で総攻撃が開始された。戦い終ってみれば七〇人中、十三名の戦死者がでたのである。明日は我が身と思いながら、冥福を祈りつつ戦友をだびに付すときの気持ちは本当にやりきれない思いであった。
昭和二十一年五月六日　復員

齊藤　武　陸軍伍長　馬登五七番地　三佐（太兵衛）
昭和十七年二月一日　召集　二十一才　父母　姉二人　兄弟三人
戦　歴
東部八部隊（東京）　釜山　北支（六ヶ月）　モンゴル包頭
河南作戦出撃（洛陽）　北京　終戦
河南作戦中、特に洛陽戦では水が悪く、生水を飲むことが出来ず悩みの種であった。体の異状があっても認められないのが軍隊であるが、四十度の高熱が三日間も続き、飲まず食わずで任務についたことは今でも忘れることは出来ない。
遠く祖国をはなれ、ふる里の山河が思い出されるときに、河南で警備中、たまたま同じ馬登出身の池田正一君と出会ったこと、夢かと疑った程でお互いに声にならず、あの時の感激は言葉ではいいつくせない、なつかしい思い出である。
昭和二十年十二月　復員

瀬戸　勇　陸軍兵長　中富二九九番地　七郎右衛門
昭和十八年十一月　召集　二十一才　父母　妹
戦　歴
東部第七十五部隊（関東軍要員）
満州国浜江省阿城県阿城独立重砲兵（十八年十二月）
陣地構築の為ソ満国境に入る（二十年六月）
ソ連軍進駐武装解除、シベリヤ連行（八月二〇日）
抑留、重労働（満二年）
戦争が終って、祖国帰還の話しでわきかえっていたのも束の間地獄への道を歩むことになろうとは、誰一人予測しませんでした。終戦五日目、ソ連軍による武装解除、全員徒歩で

飲まず食わず一週間、やっとの思いでたどり着いたのは牡丹江駅でした。貨物列車に乗せられ、シベリヤのコムソモリスクに連行され、強制重労働が始まったのです。レンガ工場、農場、伐採、道路工事、毎日が体力の限界を越えた作業でした。なにしろコーリャンのお粥と黒パン一切、他に何もありません。外は零下四〇度、空腹と寒さに耐えようがありませんでした。入浴も月に一度か二度、シャワーを浴びる程度、シラミのわいた服を着たまま、倒れるように眠りました。朝になると、永眠した戦友の名前が毎日のように話題になりました。祖国の山河を夢にみながら、酷寒の地で凍土と化した無念さは図り知れないものがありました。連行されて二年間、栄養失調で体はむくみ、やっとの思いでふる里の地を踏むことができました。国際法はどうなっているのか、政府の抑留者への対応は、未だ明解な答を聞くことができません。

昭和二十二年八月　復員

齊藤　定　　陸軍兵長　　中富二八〇番地　　甚五兵衛

昭和七年一月十日　召集　二十一才　父母　弟二人妹一人

戦　歴

東京世田ヶ谷、野砲一連隊、訓練三ヶ月、中支に派遣される。九年七月除隊

昭和十二年九月再度召集される。

支那事変勃発二ヶ月後に再び召集され、中支の野砲連隊に所属し第一線へ、馬六頭でけん引する野砲の砲手として敵と交戦、特に廬山の戦闘においては多くの友を失い、何度か死線を越える死闘であった。

昭和十六年九月　除隊

齊藤　孝一　　陸軍軍曹　　中富二九五番地　　嘉平

昭和十二年七月二十日　召集　二十六才　父母　妻　妹

戦　歴

近衛歩兵第四聯隊　宇品港　釜山　北支豊台　黄河

山済南　大汝口　泰安　山東省勦滅亡作戦　徐州会戦

支那事変勃発から二週間後、召集令状を受ける。戦争はまだまだ遠い他国の出来事として、切実感もなく、盛大な壮行会と歓呼の声に送られ日本を後にした。主たる任務は鉄道工事や鉄橋の復旧作業に参加することであった。特に大汝口鉄橋工事は一週間も食料がなく、芋だけを食って過ごしたこともなつかしい。クリークの水で飯を炊き、翌朝死体の浮いているのを見て驚くこともあった。

しかし徐州作戦では本当に戦争の苛酷さを知ることになった。一望千里続く麦畑の間を縫って、毎日の行軍は骨身に滲みた。時折遠く聞える銃声、夜はロバの寂しい啼き声を聞きながら、月明の下に高粱を敷き、死んだように眠った。五月下旬作戦任務を終えて、各所の鉄道復旧作業に従事した。

昭和十四年十二月十日　除隊

昭和十八年五月十五日　召集

戦　歴

神戸、大連、満州第十一部隊　国境警備、各種建築作業に従事する。

昭和十六年七月十七日　除隊

齊藤　芳　陸軍軍曹　中富二七九番地　作平

昭和十八年十月九日　召集　（新五右衛門）

戦　歴　三十才　祖父　父母　妻　子供三人

近衛三聯隊　朝鮮　山海関　唐山市（炭鉱警備）

北京（治安維持）　窪里附近戦闘に従事負傷

北京駅と古北口駅間の鉄道警備　終戦

初年兵教育の終了後、幹部候補生志願をしなかったので、後日中隊長に呼び出され、理由を聞かれた際、思わず『父の遺言で一兵卒として御奉公するように言われています。』と申し上げたところ、入隊時の身上書を見て、父が健在であることがわかり、ひどく叱られた。しかし、その時父はすでに他界していたことを後日知り、何か不思議な思いであった。

昭和十九年十二月三日、窪里附近の戦闘中、百十五人の中隊編成で戦死者三十八名、負傷者五十七名に達し、残り二十名で戦闘を続行したが、その時の気持ちは言葉では言い尽くせない。小生も左足首に銃傷、右肘に手榴弾を受けたが負傷兵として扱われず、ロバの背中に乗って行軍したことが一番心に残っている。

昭和二十年十二月二十九日　復員

石川　徳太郎　陸軍兵長　中富三〇四番地　平兵衛

昭和十二年三月　召集　二十一才　父母　兄　妹二人

戦　歴

東京　広島（鎌倉丸）

大連　ハイラル　松橋部隊（張北事件参戦）

ノモンハン事件参戦（十四年九月四日）

何といっても死線をさまよった、ノモンハン事件であろう。満州とソ連の国境争いであるが、思えば関東軍の独走であっ

た。死傷者一万七千人、実に兵力の七〇％を失った完敗の事件であった。矢谷隊に属しハルハ河の出口に駐屯していたが東側よりソ連機械化部隊の総攻撃を受け、たちまち全滅した。野戦病院は戦車で踏みつぶされ、多くの病人はそのまま下敷きになったらしい。逃げるところもなく川岸の水の中に身をかくし、敵が眼前を往復しているので、身動きも出来ず、三日間手を伸ばしては草の根を食い、飢えをしのいでいた。ようやく敵が去り、食糧にありつけたのは八日目であった。体は水でふやけ歩くこともやっとのことで幸運にも助かったのである。今八十二才、生きていることが不思議である。

昭和十五年九月　除隊
昭和十九年十月　召集
麻布　千葉県房州白浜　駐屯
昭和二十年八月　復員

齊藤　勝雄　陸軍軍曹　鎌滝一一三四番地　惣兵衛
昭和十七年十二月十五日　志願　十九才　父母　兄二人
姉一人

戦　歴
昭和十三年満蒙開拓青少年義勇隊　十五年帰国
十六年渡満　満州北安省義勇隊より現地において志願

沖縄県宮古島（十九年七月）

何回も大陸に渡ったので、そのつどこれが最後か見納めかと思っていました。一番心に残っていることは、農学校を卒業と同時に少年義勇隊を志願し、村境まで大勢の村人に送られ、歓呼の声と、日の丸の小旗の中を旅立った事です。

戦地ではいろいろあったが、何といっても激戦の沖縄戦でした。飛行場の警備ではたびたび艦砲射撃を受け、そのつど近くに五米位の穴が無数に出来、命拾いの連続でした。又空襲になれば一番の目標になるので爆弾が雨のように投下され多くの戦友を失いました。よくぞ生きていたものだと思っています。戦火の拡大しない義勇隊の頃、満州の広々とした草原に寝ころんで、すぎゆく白雲を見上げていた昔がなつかしく思い出されます。

昭和二十一年三月九日　復員

第二節　中富軍籍名簿

氏名	階級	召集又は志願	兵役期間	任地（勤務地）・駐屯・戦場	住所屋号
齊藤伝治	陸軍一等兵	召集（二十一歳）大正十一年十二月一日	二年	満州独立守備隊	中富四六七 伝助
齊藤豊吉	陸軍伍長	召集（二十一歳）明治三十八年十二月一日	三年	佐倉五十七聯隊	中富四六八 半三郎（半右衛門）
齊藤勇二	陸軍上等兵	召集（二十一歳）昭和十二年	二年	北支戦線・負傷・傷痍軍人	
齊藤武雄	海軍上等水兵	召集（二十歳）昭和二十年五月十五日	三ヶ月	静岡県浜名海兵団・鉄橋及び国道警備	中富四五九 三重郎（久左衛門）
齊藤勝雄	陸軍軍曹	志願（二十歳）昭和十七年十二月十五日	三年三ヶ月	満州方面、国境警備 沖縄、宮古島にて天号作戦	中富四三四 惣兵衛
齊藤武	陸軍伍長	召集（二十一歳）昭和十七年二月一日	三年六ヶ月	北支戦線・河南会戦 モンゴル国境警備	中富四三二 三佐（太兵衛）

齊藤直	陸軍一等兵	召集（三十六歳） 昭和二十年六月三日	三ヶ月	県安房南三原方面	中富四三六 紺屋 （清右衛門）
齊藤元男	海軍上等兵曹	志願（二十二歳） 昭和十七年一月	三年八ヶ月	駆逐艦夕雲乗艦・キスカ島撤収作戦 南方洋上作戦参加	
齊藤正司	海軍二等水兵	召集（二十九歳） 昭和十八年十月一日	一ヶ月	横須賀海兵団	中富四五〇 五郎左エ門
齊藤良幸	海軍一等水兵	志願（十八歳） 大正八年	六年	駆逐艦汐風乗組員 戦死	中富四六〇 外出隠居新宅
齊藤源	陸軍上等兵	召集（二十一歳） 昭和六年二月一日	二ヶ月	東京・目黒	中富五六二 三左衛門
		召集（三十四歳） 昭和十九年	二年	中国方面	
齊藤芳造	海軍一曹	召集（二十一歳） 昭和十六年一月十日	三年	中部太平洋方面 戦死	
田村耕一	陸軍上等兵	召集（二十一歳） 昭和十八年四月十日	二年五ヶ月	近衛歩兵第一聯隊 宮城の御守衛勤務	中富五六六 太治右衛門

齊藤茂雄	陸軍一等兵	召集（二十五歳）昭和十八年六月十五日	一年二ヶ月	佐倉六十四部隊 世田谷大蔵陸軍病院	中富五六九 兵右衛門	
齊藤栄一	陸軍上等兵	志願（十八歳）昭和十八年五月十五日	二年一ヶ月	津田沼鉄道聯隊		
齊藤秀男	陸軍二等兵	召集（二十歳）昭和十八年三月十八日	三ヶ月	東京深川 東部一、九九三部隊	中富五七〇 兵左衛門	
齊藤忠造	陸軍兵長	召集（二十一歳）昭和十二年十二月四日	三年	満州・孫呉・砲兵隊	中富四二五 伝右衛門	
齊藤藤衛	陸軍曹長	志願（十八歳）昭和十五年十二月	六年十ヶ月	北支那方面		
齊藤博久	陸軍技術少尉	志願（二十歳）昭和十九年九月	一年二ヶ月	立川航空工廠配属	中富四二六 外出隠居	
齊藤貞三	陸軍伍長	召集（二十一歳）明治三十九年六月十四日	三年	近衛四聯隊 日露戦争従軍	中富四一四 源左衛門	
齊藤清	陸軍上等兵	召集（二十一歳）大正十二年二月一日	二年	習志野騎兵十五聯隊		

齊藤忠作	陸軍伍長	召集（二十二歳）明治三十九年	一年	佐倉五十七聯隊		
齊藤俊雄	陸軍伍長	召集（二十二歳）昭和七年四月一日	五ヶ月	佐倉歩兵第五十七連隊	中富四一〇 湯屋（所左衛門）	
		召集（三十三歳）昭和二十年六月一日	二ヶ月	伊豆大島 歩兵三百二十五連隊		
齊藤孝作	陸軍伍長	召集（二十一歳）昭和十七年一月十日	四年五ヶ月	セレベス・フィリッピン 満州		
齊藤守	陸軍一等兵	召集（二十九歳）昭和十九年	一年	埼玉県深谷	中富二九八 さえむ（藤右エ門）	
齊藤保	陸軍伍長	召集（二十一歳）昭和十七年四月	四年	南太平洋方面 スマトラ駐屯	中富三〇二 長左衛門	
瀬戸勇	陸軍兵長	召集（二十一歳）昭和十八年十一月	一年九ヶ月	満州 独立重砲兵 ソ満国境	中富二九九 七郎右衛門	
		ソ連軍連行・抑留 昭和二十年八月二十日	二年	シベリア・コムソモリク重労働		

齊藤一己	海軍 上等機関兵曹	召集（二十一歳） 昭和十二年十二月一日	七年	横須賀・第七艦隊戦艦山城乗艦 ソロモン海戦 戦死	中富二七八 隠居 （三郎左衛門）
齊藤寛	陸軍 伍長	召集（二十六歳） 昭和十五年十二月一日	五年五ヶ月	上海鳶三〇六四部隊	
齊藤莊太郎	陸軍 上等兵	召集（二十一歳） 明治二十九年	三年	青山近衛四聯隊	中富二七九 作平 （新五右衛門）
		召集（二十九歳） 明治三十七年	二年	旅順	
齊藤芳	陸軍 軍曹	召集（三十歳） 昭和十八年十月九日	二年二ヶ月	北支戦線・警備 討伐部隊	
鳥海善藏	陸軍 一等兵	召集（二十一歳） 明治三十一年	二年		中富三〇六 善兵衛
鳥海益雄	陸軍 二等兵	召集（二十歳） 昭和二十年七月十七日	二十八日	佐倉五十七聯隊 千葉県房総方面	

齊藤友吉	陸軍一等兵	召集（三十一歳）明治四十一年	二年	北海道旭川連隊	
齊藤定	陸軍兵長	召集（二十一歳）昭和七年一月十日	三ヶ月	世田ヶ谷・野砲一連隊	
		召集（二十六歳）昭和十二年九月	四年	野砲の砲手として第一線へ 盧山戦線従軍	中富二八〇 甚吾兵衛
齊藤英雄	海軍二等整備兵曹	志願（十八歳）昭和十八年五月一日	二年三ヶ月	四五二海軍航空隊 鹿児島海軍航空隊	
齊藤昭一	海軍一等水兵	志願（十七歳）昭和二十年二月一日	七ヶ月半	横須賀武山海兵団	
鳥海幸次郎	陸軍軍曹	召集（二十一歳）大正五年十二月	四年	横須賀重砲第一聯隊	中富三〇五 甚五右衛門
鳥海勲	海軍一等水兵	召集（二十歳）昭和二十年五月五日	四ヶ月	静岡県浜名海兵団	

齊藤庄作	陸軍	召集（二十一歳） 明治三十八年	二年	日露戦争従軍	中富四〇七 泉屋 （清左衛門）
齊藤仙蔵	陸軍 少尉	召集（二十一歳） 大正五年十一月	一年	佐倉五十七連隊	
瀬戸正太郎	陸軍 伍長	召集（二十一歳） 昭和四年四月一日	五ヶ月	近衛歩兵第三聯隊	中富四〇五 作助
		召集（三十七歳） 昭和二十年六月一日	二ヶ月	三宅島	
瀬戸伊之助	陸軍 上等兵	召集（二十一歳） 明治四十一年	三年	佐倉五十七聯隊	中富三〇〇 小右衛門
瀬戸初治	陸軍 曹長	召集（二十一歳） 大正十一年十二月一日	二年	朝鮮・羅南・野砲二十五連隊	
		召集（三十五歳） 昭和十二年九月	六年	中国・山東省・済南・大島	
齊藤徳治	海軍 整備 兵長	志願（十七歳） 昭和十八年五月一日	一年十ヶ月	第二南遣艦隊司令部 硫黄島に於て戦死	中富三〇七 市郎兵衛

瀬戸繁	陸軍二等兵	召集（二十一歳）		三ヶ月	鉄道連隊	中富八三六由元
齊藤宗司	海軍一等水兵	召集（三十五歳）	昭和十九年四月二十七日	一年三ヶ月	相模野海軍航空隊	中富三〇八―一煎餅屋
田村政雄	陸軍一等兵	召集（二十歳）	昭和二十年五月	二年一ヶ月（拘留を含む）	満州・奉天方面	中富三〇九新左衛門（吉兵衛）
田村芳郎	陸軍少尉	召集（二十二歳）	昭和十八年十一月一日	一年十ヶ月	北支戦線・兗州・帰徳南方軍・ジャワ島・砲兵隊	中富三一〇酒屋（太右衛門）
寺島敬二郎	海軍飛行中尉	志願（二十歳）	昭和八年	十二年	木更津航空隊・重慶・渡洋爆撃マレー沖海戦・雷撃機操縦・ラバウル航空隊	中富三一一
齊藤国三郎	陸軍飛行大佐	志願（十八歳）	大正五年	二十五年	陸軍士官学校・飛行機操縦士・満州事変熊谷飛行場・米子飛行場・航空機乗員養成所・場長・所長・シンガポール	中富三一二かじや（新右衛門）
齊藤光臣	陸軍大尉	志願（十八歳）	昭和十年四月十日	十年四ヶ月	千葉県鉄道聯隊中支・南京	
齊藤謹司	陸軍伍長	志願（十八歳）	昭和十八年五月十五日	二年一ヶ月	津田沼鉄道聯隊	

齊藤徳松	陸軍二等兵	召集（二十一歳）明治三十二年	三ヶ月	東京目黒	中富二八二 平四郎	
齊藤正三	陸軍一等兵	召集（三十歳）昭和十八年八月	一年	中華民国山東省歴城県 戦病死		
齊藤政雄	陸軍一等兵	召集（二十歳）昭和二十年四月	四ヶ月	広島県		
齊藤六助	陸軍上等兵	召集（二十一歳）大正十一年一月	二年三ヶ月	佐倉五十七聯隊 中国北京大使館警備	中富二八三 六次郎（六郎右衛門）	
齊藤乙吉	陸軍上等兵	召集（二十歳）昭和二十年三月二十九日	五ヶ月	千葉県九十九里浜警備		
齊藤伊之松	陸軍一等兵	召集（二十一歳）明治三十九年四月一日	二年	日露戦争	中富二八四 権三（重右衛門）	
齊藤伊之松	陸軍一等兵	召集（二十一歳）昭和十二年十二月	二年	中国戦線		
齊藤信雄	陸軍一等兵	召集（二十歳）昭和二十年一月	七ヶ月	四国方面		

石川初治	海軍 上等水兵	召集（三十九歳）	昭和十八年三月	二年六ヶ月	横須賀海兵団
石川徳太郎	陸軍 兵長	召集（二十一歳）	昭和十二年三月	三年六ヶ月	張北事件・ノモンハン事件参戦
		召集（二十九歳）	昭和十九年十月	十ヶ月	房州白浜駐屯
石川盛治	海軍 一等水兵	志願（十八歳）	大正六年	四年	戦艦筑波・第一次世界大戦 南太平洋従軍 戦死
石川治孝	陸軍 上等兵	召集（二十一歳）	大正十二年一月	二年	佐倉五十七聯隊 麻布憲兵隊
小西啓蔵	陸軍 二等兵	召集（二十一歳）	明治二十七年	一年	日清戦争従軍 満州大連市 戦死
小西清助	陸軍 上等兵	召集（二十一歳）	明治二十六年	二年	日清戦争
		召集（三十一歳）	明治三十七年	二年	満州・旅順

中富三〇四 平兵衛

中富三〇三 平右衛門

中富二九七 源兵衛

齊藤聰	陸軍上等兵	召集（三十六歳）昭和二十年二月十一日	一年七ヶ月	天津秀麗作戦	中富二九三六右衛門	
齊藤博	陸軍少佐	志願（十八歳）昭和六年十二月一日	十四年	陸軍省兵器本部付東北大学米沢高工応用化学研修		
齊藤留吉	陸軍工兵一等兵	召集（三十四歳）昭和二十年三月	六ヶ月	神奈川県平塚	中富二九六六郎兵衛	
齊藤孝一	陸軍軍曹	召集（二十六歳）昭和十二年七月二十日	二年五ヶ月	北支戦線徐州会戦	中富二九五嘉平（嘉兵衛）	
		召集（三十歳）昭和十六年七月十七日	二年	満州方面国境警備		
齊藤鎮夫	陸軍上等兵	召集（二十六歳）昭和十七年	三年	市川国府台高射砲	木更津市に転居権十（六兵衛）	
金綱一作	陸軍	召集（二十一歳）大正二年	二年	佐倉五十七聯隊		
齊藤巳之吉	陸軍一等兵	召集（二十一歳）		野戦第四連隊四街道	神奈川県転居竹次郎	

齊藤茂次郎	陸軍	召集（二十一歳）大正十二年二月一日	二年	鉄道連隊	富津市に転居庄左衛門
齊藤庄之助	陸軍曹長	召集（二十一歳）明治三十四年		日露戦争従軍	東京都に転居伽藍
剣持悌忍	海軍上等水兵	召集（三十一歳）昭和十九年六月十五日	一年四ヶ月	横須賀海兵団茅ヶ崎	中野に転居

以上七十七名

忠　魂　碑